

## 「ジャポニスム 2018：響きあう魂」

### コンセプト

—2018年は日仏友好160年の節目の年である。日本が近代化の扉を開け、欧米に学ぼうと門戸を開いた明治の時代が始まって150年の記念すべき年でもある。日本が欧州と遭遇した19世紀、欧州にはジャポニスムの旋風が巻き起こった。2018年、再びフランスの地において、改めて「ジャポニスム 2018」を実施する意義は何か。

—奇しくも2018年は、20世紀初頭に駐日フランス大使を務め、劇作家、詩人でもあるポール・クローデルの生誕150年である。稀代の知日派である彼は、エッセー「日本のこころを訪れる眼」(“Un Regard sur l'Âme Japonaise”)の中で、次のように論じた。すなわち、日本人は自然の中に人間を超越する崇高なものが宿っていることを感知し、自我を主張するよりも、これらに対して恭敬の気持ち (respect と révérence) を持つところが優れた特性である。そして、日本の絵画や文学の中にこの日本人の特性たる「魂のうるほひ (l'humidité de l'âme)」が表現されているのだ、と。

—確かに、日本人は、常に外部からの異文化を取り入れ、自らの文化に融合させることで、伝統を継承しつつも、新しい文化を創造してきた。多様な価値がひしめき合う列島で、それらが時に調和し、時にぶつかり合いながらも共存するところにこそ、善悪を超えた「美」があると評価してきた。「異物の混在とその調和」という、互いに矛盾し相反するものを総体で捉え、「二つでひとつ」となったときの調和を美しいと感じる感受性を持っている。物質から離れた精神性を大自然から感じ取り、たとえ災害に遭っても自然を畏敬する姿勢を貫いている。まさに、クローデルが洞察した日本の美意識そのものである。

—19世紀のフランスでは、当時最も先端的であった芸術が、日本の新しい表現によって好奇心を喚起された。その後150年を経て、我々の社会は大きく変化したが、フランスの人々やアーティストの視線を現代日本へと向けさせるのは、この同じ新しさの探求である。現代日本は発想 (インスピレーション) と革新 (イノベーション) の源泉であり続けている。

—フランス人は、世界に冠たる歴史と芸術・文化を持ち、高度な精神文化を有する国民である。だからこそ、2018年の「ジャポニスム 2018」を通じて、日本とフランスは、感性を共鳴させ、協働することができるであろう。そして、そのような魂の響き合いを通じて、21世紀の国際社会が直面している新たな諸課題にも協力して対処していくための糸口を発見することができるのではないだろうか。

—1世紀以上前に日本の浮世絵の発見が引き起こした美的衝撃と同じように、「ジャポニスム 2018」は、現代日本の創造の活力と人を魅了する力とを再び証明するだろう。人を驚かせ、絶え間なく伝統を刷新し、新しい世代のアーティスト、デザイナー、建築家、映画人を披露する、これが「ジャポニスム 2018」の目指すところである。

「水の上に 水のひびき 葉のうへに さらに葉のかげ」  
山内義雄訳 クローデル詩集「百扇帖」より